

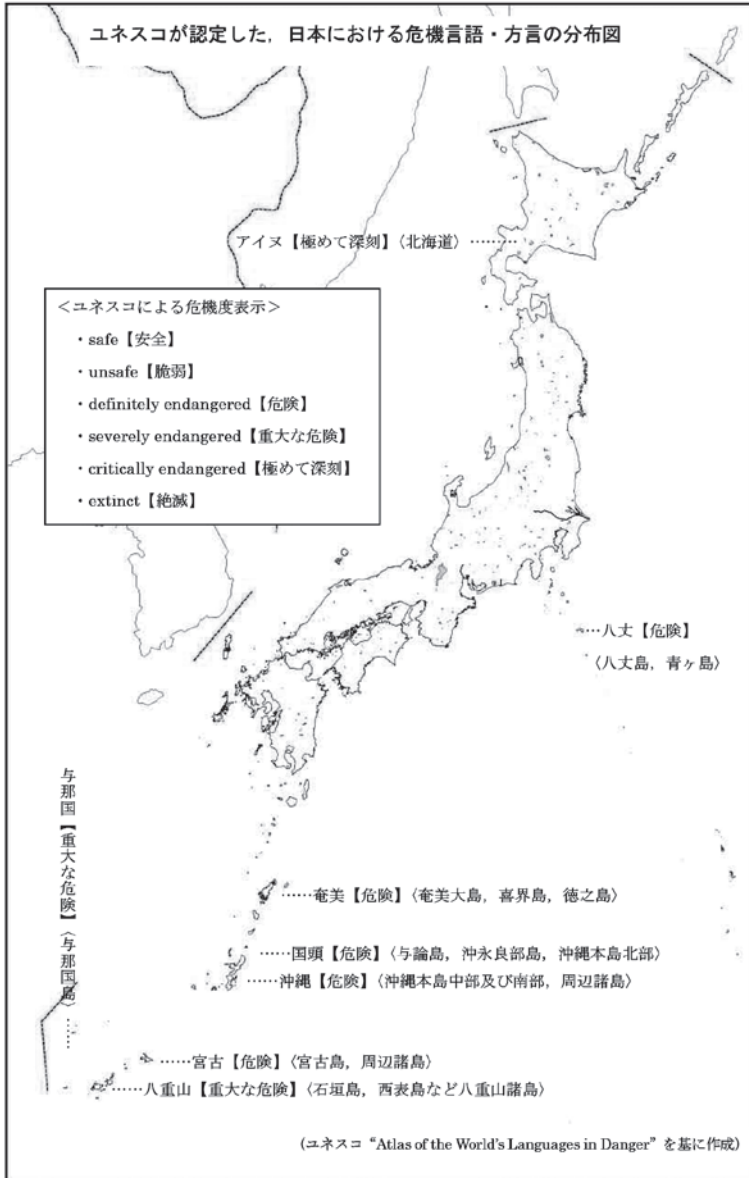
東アジアにおける危機言語

安部 清哉

このたび東洋文化講座が通算一〇〇回を迎えることになり、これを記念して、通常の連続講座とは別に、特別記念講演会を開催することとなりました。そこで、「東アジアにおける危機言語」という講演会テーマのもと「消滅の危機にある言語」について、お二人の先生をお招きし、サオ語とアイヌ語に関連する二つの講演を行うことにいたしました。

『Endangered language, (UNESCO)、「消滅の危機にある言語・方言」(文化庁)、「消滅(死語化)の危機に瀕する言語」(Wiki)とは、使用者(特に母語話者)の減少などにより消滅(死語化)の危機にある言語のこと、危機言語とも呼ばれます。ユネスコ(国連教育科学文化機関)は、『世界消滅危機言語地図 Atlas of the World's Languages in Danger』(第三版、添付図参照)を発行し、世界の約六〇〇〇言語のうちの二五〇〇あまりの言語が消滅の危機にあると指摘しました。ユネスコでは消滅の危機にある言語・方言の程度を、以下の六段階で示しています(ユネスコでは言語と方言とを「language」として一括して扱っています)。

○文化庁「ユネスコが認定した、日本における危機言語・方言の分布図」より
https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/pdf/bunpuzu.pdf



- (一) 安全 すべての世代によってその言語が話されている状態。
- (二) 脆弱^{せいじやく} ほとんどの子供たちが話しているが、特定の場所(家庭など)に限って使われている状態。
- (三) 危険 子供が家庭でもはや母語として習得しない状態。
- (四) 重大な危機 祖父母以上の世代によって話されており、親世代では理解されるものの会話で使用されておらず、親子や子供同士でも話されていない状態。

(五) 極めて深刻 祖父母の世代でさえ部分的に、また、まれにしか話されない状態。

(六) 消滅 その言語を話す人がいない状態。(『日本大百科全書』での邦訳より)

日本国内では八言語・方言が消滅の危機にあり、アイヌ語が「極めて深刻」に認定され、そのほか「重大な危機」に八重山語と与那国語、「危険」に沖縄語、国頭語、宮古語、奄美語、八丈語が認定されました。東洋文化研究所の活動の一環としても、アジアにおける危機言語について取り上げることが意義があると思われました。

さて、今回の講演の一つは、新居田純野氏による「消滅の危機言語である台湾原住民語『サオ語(邵語)』です。新居田氏の講演は、二〇〇五・二〇〇六年度に行われた東洋文化研究所一般研究プロジェクト「危機言語・サオ語(台湾中部)の現地調査による基礎的言語調査と研究」(代表・安部清哉研究員、新居田氏は客員研究員)の成果の一つとして、新居田氏の『台湾原住民瀕危言語 邵語』(大新書局、台北、二〇一八年)が刊行されたことを紹介させていただく意味もありました。

新居田氏は、サオ語だけでなく広くアジア言語の「存在・所有」の動詞を研究テーマとされています。日本語では「存在・所有」は存在動詞「YにXガアル」によって表わされます。この表現形式におけるXとYの組み合わせ、およびXとYの関係から、「がある」構文の表わす意味的内容は、「存在」「所属」「外在」「部分集合」「所

有」「特性」「内在」「デキゴト」の八つに分類されますが、これらの存在・所有表現と対照させて、ベトナム語、タガログ語、マレーシア語、タイ語、台湾原住民語のサオ語とブヌン語の言語における存在・所有表現の構文形式の特徴を研究されています。その研究の一部とサオ語の危機的状況を紹介しています。

いま一つは、板橋義三氏による「マタギ語とアイヌ語の言語接触とマタギ語の起源と歴史」です。二〇一九年四月に成立したアイヌ新法（正式名「アイヌの人々の誇りが尊重される社会を実現するための施策の推進に関する法律」）によって、アイヌ民族も先住民族として初めて法的に位置づけられました。アイヌ民族のアイヌ語も、さらにその痕跡（マタギ語や地名等）も消滅の危機にあります。国内にある危機言語の一つアイヌ語の痕跡に深く関わるマタギ語について考えることは、大いに意義のあることと思われれます。

板橋氏のご専門は比較言語学、地域言語学、接触言語学、通時言語類型論、日本語、琉球語、アイヌ語、朝鮮語、アルタイ諸語他、言語広範に及びます。ワシントン大学（シアトル）でアジア言語学博士号を取得後、ワシントン大学東洋学部日本語学科助手、豪州メルボルン大学東洋学部日本語学科助教授を経て、一九八九年より九州大学言語文化部日本語科に着任され、現在、九州大学名誉教授です。関連するご著書には、『マタギ語辞典』（二〇〇八年、現代図書）、『アイヌ語・日本語の形成過程の解明に向けての研究——地域言語学、言語類型論、通時言語学を基盤にした学際的アプローチ』（二〇一四年、現代図書）のほか、『日本語と朝鮮語の方言アクセント体系と両言語の歴史的関係に関する理論的・実証的研究』（二〇一九年、現代図書）があります。

講師お二人のご原稿は、ご講演をもととしながらも新たに論文文としておまとめくださった内容となっています。